

「袋中上人の研究」

中村裕晃

(一)

上人は戦国時代とも呼ばれる天文二十一年（一五五二）奥州（福島県岩城郡磐前村）に生まれ、良定弁蓮社入観と号した。七才で出家し、十四才にして得度して袋中と名乗り、後青年時代には浄土宗学は勿論のこと、広く諸学の研究に精進し、従つてその学問に至つては「梵漢対映集」「血脉論」「麒麟聖財論私釈」「大原瑞書」「啓袋中」「明眼論記」「琉球神道記」「琉球往来記」「天笠往生記抄」「臨終要決抄」「聖鬘贊」「曼荼羅白記」「元亨釈書略頌」「評摧邪論」「四十二章經註」「涅槃考文鈔」「泥洹之道」「弥陀偈抄」「舍利礼文記」等この他多大の著作を行い、又或時は古記録の蒐集整理に就き、伝法、故実関係等の散失を防ぎ、これらは常に後世を啓発しているのである。そこで私は上人に於てこの

期に於ける仏者としての学問的教養の総合、並びに宗史上に於て上人の時代的背景と云つた所を考察して見たいと思う。

(二)

先づ当時、即ち江戸時代初期の仏教界の情勢を見る時、各宗派の共通する所として、(一)戒律尊重、(二)教学の興隆の二つが挙げられる。浄土宗に於ても当時の俗化した教団から少しでも法然の精神を見出そうとする新しい運動が起つて来たのである。一つは僧侶にして戒律を守るものが少なく、著しく僧風が墮落して来たのを嘆き、特に仏制の律義を復興せんとした運動であり、今一つは当時の寺院が俗化してゆくのを嘆き、俗塵を離れた静閑な地に道場を設け、仏制を守り念仏修行に専入し、以つて宗祖の恩に報んとする運動であつた。前者は念戒一致の運動であり、後者は新念仏運動で所謂、興律派、捨世派と呼ばれるものである。こうした新しい運動は戦国末から始まつており、称念、或は上人の肉兄以入、弾誓、関通徳本等により諸地方に展開されて行き、又靈潭、湛慧、徳嚴、義灯、普寂、敬首等によつて浄土律が興隆された

のである。こうした浄土宗の情勢の中で袋中上人な出家
されているのである。「光明院開基以八上人行状記」に
よれば以八上人は、榮譽を好まず、俗塵を離れ、念仏修
行に専入された前述の新念仏運動の実践者である。この
以八上人の弟であり、親交のあつた袋中上人も新念仏運
動の流れの上に位置して居ると見られるのである。以八
上人が袋中上人に送られた消息一部を見ても当時の仏教
界を批判し、熱烈真摯な求道精神のほどが伺い知る事が
出来る。従つて以八の精神が袋中上人に強い影響を与え
ていると思われるのである。

(三)

浄土宗に於ける教学の興隆は江戸時代中期以後であり
江戸時代初期に於ては教団自体の過度期のために僅かな
学者が出たのみであつた。袋中上人は丁度この時期に出
た学者である。上人は名越派の僧であり、上人自筆「浄
土五重相伝次第抄」によれば、名越派五祖良栄以降を
良栄―良寂―良蔵―良本―良照―良鐘―良岡―良大―
良怡―良宣―良要―良呈―良定
となつており、名越派の伝法を相伝している。又自ら多

くの著作をあらわし、宗義の影影に務めると共に、その
中広い知識を以つて教化門弟の養成にあつたのである。
更に「五重略釈」「五重別釈」「難遂機要釈」「授手印
要釈」「領解要釈」「決答要釈」等の伝法書の註釈書六
部を頭わし、特に名越の伝法について大いに寄与する所
があり、伝書の沿革を知る上に於て重要な資料とされて
いるのである。又遠く琉球に遊学された際の著書「琉球
往来記」「琉球神道記」等も琉球に於ける当時の神道を
知る上にも重要な資料とされているのである。

以上袋中上人は、教学が興隆する江戸中期以前に於て
既に多くの著書を出し、宗義の顕彰につとめ、彼の弟子
である東暉、東暉の弟子聞証等の学者と共に、この時代
の教学を支えていたと見ることが出来るのである。即ち
浄土教義は聖光、良忠そして聖岡、聖聡によつて大成さ
れたのであるが、以後戦国時代情勢の影響により、余り
振わなかつた宗の教学は江戸中期に至つて、大いに興隆
したのも、その影には袋中上人の如き不屈の信念を持つ
学僧あつてのものである。と云つても過言ではない。そ
して丁度この時代は前代との過渡期に袋中上人が位置し

ていたと云い得るのである。

法然上人の和歌について

武 藤 善 史

今日、法然上人の和歌として世に知られているものは二十三首を数えることができる。すなわち「勅伝」第三十巻に十七首、第三十四巻に一首、第二十一巻に今様歌一首と「和語証録」第四に一首、「高田本法然上人法絵」巻下に二首、「弘願本法然聖人絵」第二に一首の合計二十三首である。

「和語証録」第五に「一百四十五ヶ条問答」があるがその中で歌をよむことの是非の問答が出ている。すなわち

歌よむは罪にて候か。

答。あながちに得候はじ、但罪ともなり。功德ともなる。

上人の答の意味は、それが専修念仏の助けとなるならば

それは功德となり妨げとなるならば罪となるというのである。

無量寿經には

至心信樂欲生我國乃至十念若不生者不取正

覺唯除五逆誹謗正法とある。

至心に如来を信じ、至心に如来を愛し、至心に浄土へ生れんと欲して念仏を申すならば、必ず浄土へ往生できるのである。

○三心の中の至誠心のことを

往生はよにやすけれとみなひとのまことの心なくてこそせぬ。

至誠心とは真実心のことであり、外に賢善の相を現わし、内に虚仮心をいなくことなく、身口意の三業に修業するところの行業はすべて真実の心をもつてすることである。

至誠心とは真実心のことであり、衆生本有の仏性である。

一切国土の悪を捨て善を選び取ることによつて仏の一切の善根を満して成仏できるのである。